

# OKEN

# 桜建会報

2018-December No.113

日本大学桜門建築会

<http://www.okenkai.jp/>

## contents

特集◎建築の葬式——2

[5号館] 学ぶ、想い「流転の設計」審査と結果 [5号館] 聴く、撮る、甲ろ

短期連載◎さよなら5号館 最終回——8

ピロティの壁面彫刻 泉幸甫

研究室紹介◎建築歴史意匠研究室 建築計画研究室——11

もうひとつの世界から◎世界遺産の旅 木村翔——12

事務局だより——14

学部ニュース——15



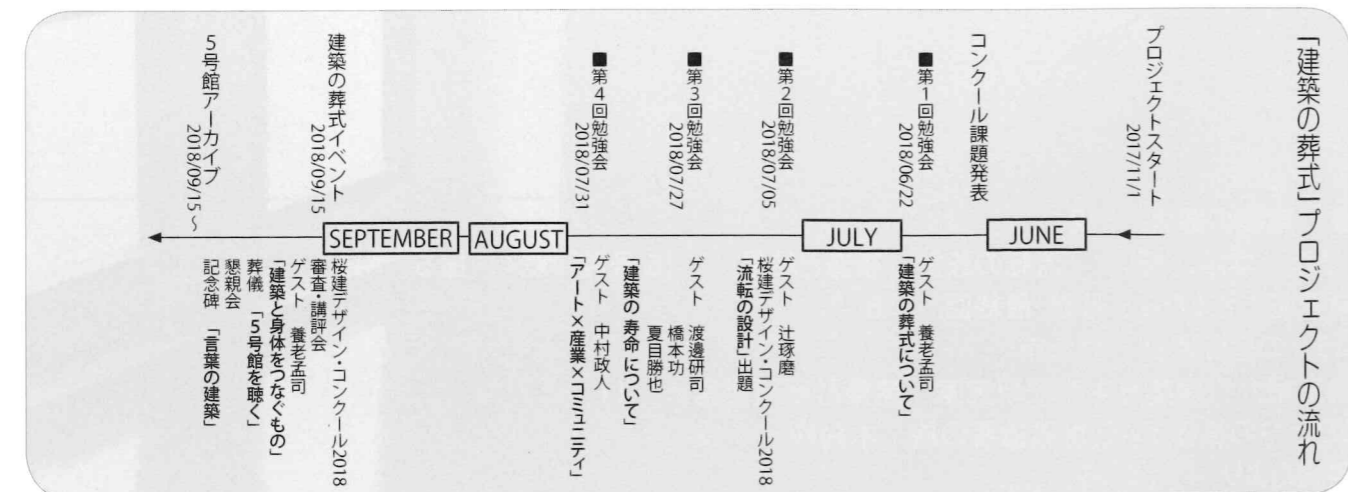


写真/鈴木さや香(表紙、特集のものすべて)

2018年9月15日、駿河台校舎5号館の解体を前に「建築の葬式」を執り行いました。当日は、学内外の学生から幅広い層のOB・OGが5号館を訪れ、5号館との「終わりの時間」を過ごしました。また、当日や事前の勉強会では、5号館を通じて人びとが集うことで「始まりの場」がいくつも生まれました。

「建築の葬式」と題したこの企画は、5号館という建物が育んだ時間を、その空間にいた人びとによってきちんと整え、現在や未来にその歴史を引き継ぐ行為であったと言えるかもしれません。先日開催された建築学会のイベント「建築週間2018 パラレルセッションズ2018」に集った全国の方々にも「建築の葬式」は認知されており、建物の終わりをデリケートに扱うこと(すなわち現在や未来を見据えた建物のあり方への思考)の意義が、当事者だけではなく、普遍的な価値観として届いたことを実感しました。昨年11月に有志のOB・OGや学生らが集まり、約11か月にわたる準備、多くの関係者のご協力やご支援のもと、無事祝祭の日「建築の葬式」を迎えることができました。

「建築の葬式」から生まれた議論は現在も続いております。この場をお借りしてお礼を申し上げますとともに、OB・OGの皆さまにその様子をお伝えいたします。(北川健太/桜門建築会青年部代表)



## 5号館を学ぶ —— 田中麻未也(理工学部建築学科職員) 建築と身体をつないだ先に

「建築の終わりとは？」答えがひとつでないことが明白なこの問いに対し、私たちは、できるだけ多くの方々との議論を重ねることこそが唯一の解決であり、本企画の主旨だと考えました。結果、ゲストは学内外、分野を問わない非常に豊かな顔ぶれとなりました。

解剖学者の養老孟司氏を迎えた第一回「身体・宗教」は、宗教や民族による吊りという文化の違い、日本の慰霊に対する文化について触れ、建築から離れつつも、その根底に関わる深い議論がなされました。第二回「建築」は、建築家の辻琢磨氏をお呼びし、伊勢神宮や江戸の街などを参照し、建築を大きな時間の流動体としてとらえた、流転というキーワードから建築の新たな考え方を語っていただきました。続く第三回「歴史」は、数々の建築保存運動に携わってこられたDOCOMOMO JAPANの渡邊研司氏、橋本功氏、夏目勝也氏から、建築の寿命と切実に向き合った実践的なお話をうかがいました。最後の第四回「美術」は、終わりとは対照的に、次の世代に記憶や想いを伝えるため、アートを通して始まりをつくってこられた美術家の中村政人氏に、都市・コンテクストを読み解くことの可能性についてお話いただきました。

すべての議論に共通していたのは、建築との関わりの中で「いかに建築を身体に近づけていくか」ということでした。儀式、記録、アートなど文化や時代によってその方法はさまざまですが、いま私たちが建築の葬式を行う意味を見つけたような気がします。しかし、それは私たちにとっての答えに過ぎません。本当に大切なことは、ともに議論してきた時間であり、それをこの先も続けることでしょう。葬式当日、養老氏が講演の最後に口にされた「答えは出さない方がいいと思います。考え続けることをやめたら大事なものを取りこぼしてしまう。」ということばがそれを物語っています。

## 5号館への想い —— 岩井光男(前・桜建会会長)

御茶ノ水駅聖橋口を出てニコライ堂の横を過ぎると、日大理工学部5号館が目の前に現れる。5号館は私のタイムカプセルである。

1960年代後半の学生運動の影響を受けながら、研究室や製図室で過ごした日々の思い出が詰まった建築である。60年代ニューブルータリズムを代表する建築の5号館は、建築学科の学生にとって教科書でもあった。それが今年解体される。

建築物にいつの日かその日がくることは人間と同じである。しかし、現在の日本の建築の寿命は40～50年、人の平均寿命より短い。日本の建築物は老朽化による安全性の低下と機能的劣化による維持管理費の増大など、経済的な理由で建て替えられる。そこには文化的視点が欠如している。建築物は、建てられた時からさまざまな人びとにとって意味のあるものとなる。さらに時間の経過とともに街の景観の一部となり、その時代の街並みを形成する。この街、この建物で生活していた人びとの想いが建築の本当の価値を生む。そんな建築が消えゆくとき、葬式というかたちで建築との対話を実施した今回の催しは、たいへん意義のあるものと考えている。





テーマの設定

コンクールは、建築の「終わり」にふさわしいものであると同時に、学生とOB・OGが世代を超えて議論できるような「始まり」が感じられるものとする必要がありました。そんな想いをゲスト審査員である辻琢磨氏に伝え、提案されたテーマが「流転の設計」です。

「一本の映画で考えてみましょう。目に見える一つの敷地の中に立ち上がる一つの建築物は、ストーリーの一つの場面を切り取ったワンシーンに過ぎないということです。」(課題文より抜粋)

つまりは、建築における寿命を、ひとつの建築の生き死にに限らず、その前後にある別の姿や状態(材料の由来、改修や転用のされ方など)も含めた、より長い時間ととらえたとき、建築にはどのような可能性があるかを探る課題です。



後列左から古澤大輔先生、辻琢磨氏、小野志門氏。前列左から山本留以さん、湯川智咲さん、富樫由美さん、須貝仁君

審査の経緯

多世代にわたった応募者からの作品は非常に多様であり、審査は辻氏、古澤大輔先生と共に行った一次審査の段階から大いに盛り上がり、その熱は公開二次審査でも冷めることはありませんでした。

その中で、最後まで議論に残ったのは、5号館の基礎を残した広場空間を提案した大賀案と、5号館のイメージを衣類やお菓子などで模した富樫案です。大賀案は、5号館の構造をよく理解したうえで、都心部における法的規制や経済的特性を加味することにより、跡地というものに過去の文脈と将来性を両立させる提案でした。一方の富樫案は、建築をあえてヒューマンスケールに落とし込むことで、その記憶を身近に留めながらも、そこに新たな建築への着想を予感させる提案でした。

どちらも素晴らしいのですが、「流転」ということばのもつ時間や視点の多様さを、ユニークかつ巧みなスケール操作で表現できていた富樫案がわずかに勝り、最優秀賞に選ばれました。

コンクールを通して

建築とはゼロから生まれるものではありません。施主や土地のもつコンテキストや自分の中にある多くのイメージによって紡がれるものです。5号館という建築は確かに終わりを迎えますが、その断片は卒業生それぞれの内にあり、そしてそれらが、いつか別のかたちやスケールで立ち現れる日があるのかもしれません。そんな、建築が本来もっている連なりや広がりのようなものを、このコンクールを通して感じてもらえれば本望です。

応募数/理工建築 19名6作品、生産工1名1作品、理工海建 4名1作品、OB・OG 6名8作品

最優秀賞  
受賞コメント  
富樫由美

「流転」とは、日々変化し、続いていくものなのではないでしょうか。慣れ親しんだものがなくなるとき、私たちはどうしてもさまざまな想いを抱えます。そこで、変化の必然性を認めてみましょう。建築がつくり出したつながりや思い出といったぼんやりしたもの、それらをスケールや媒体を変換することで、つなげていけるようにしたいと思っています。

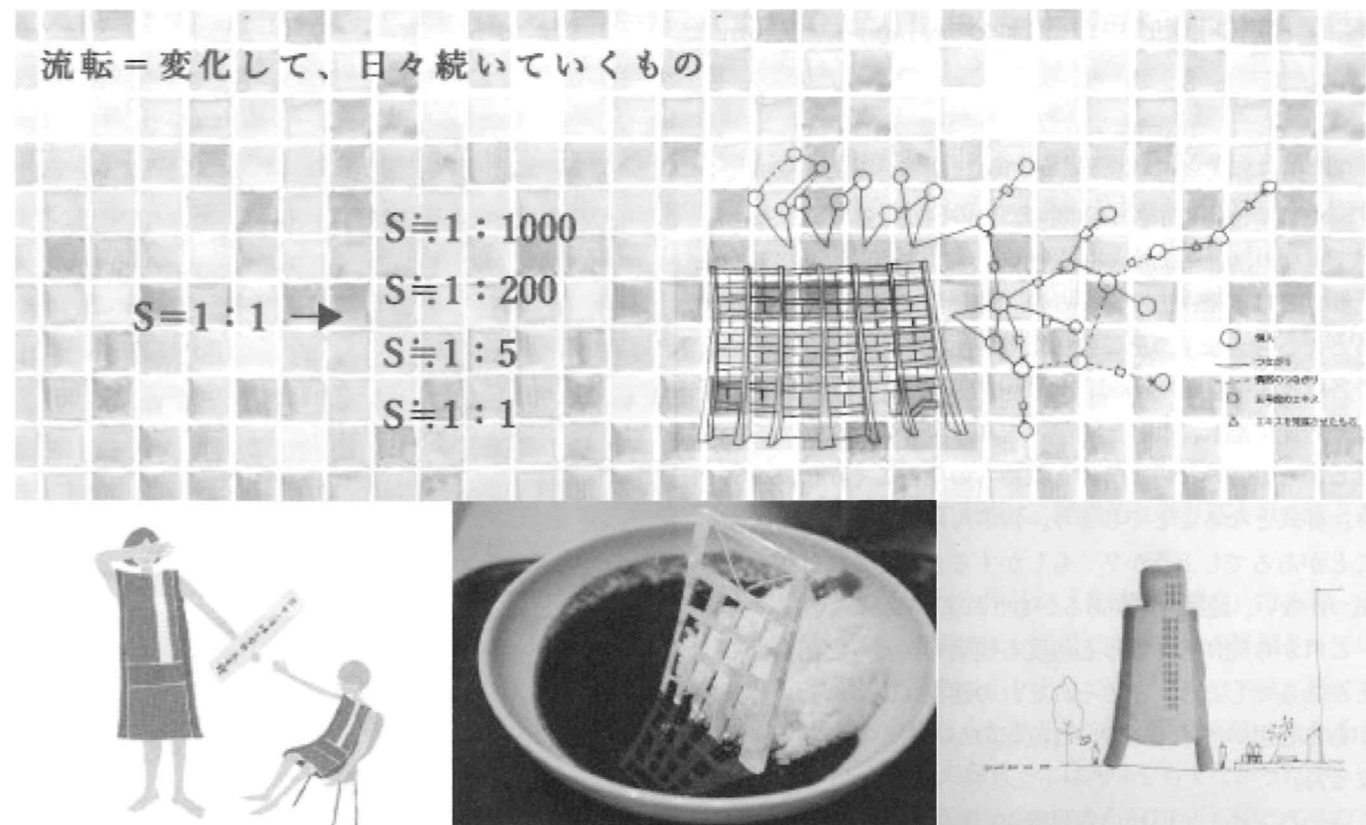
例えば、5号館。階段室のタイルをテキスタイルにし、ハンカチにします。水滴をふくたびに取り出します。立面をワンピースにします。人混みの中で5号館の面影を見かけるかもしれません。学食のカレーに塔屋をパイ生地にして差し込み、学生に提供します。切羽詰まった学生が設計課題に似たような線を引くかもしれません。クッキー型をつくり、子どものおやつに出しましょう。

名もないビルや家でも、そこにはだれかのぼんやりがある。それらを流転の中に変換し、日常につなげていき、その先にまた建築といったものになればと思っています。

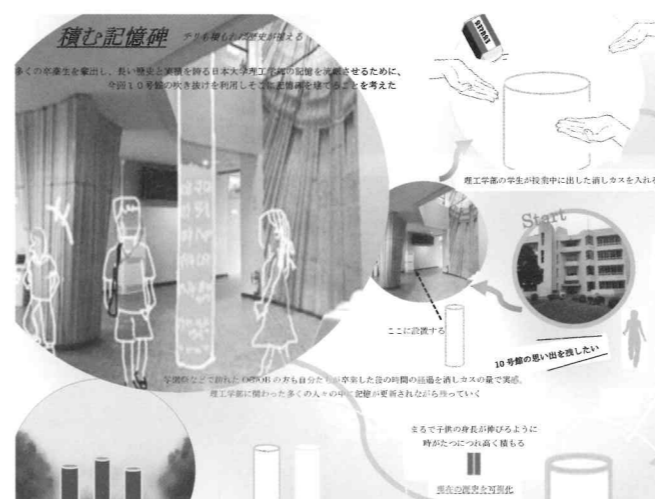
光栄な賞に選んでいただき、嬉しく思っています。審査、運営、桜建会の方々にお礼申し上げます。最後に私の気持ちとして、ある本の一文を拝借します。

「伝えようとするのは、そこに作られた物自体ではなくて、精神を担う形であり、物は精神を表すための手段であり、物それ自体は永久に残り得ないもの」

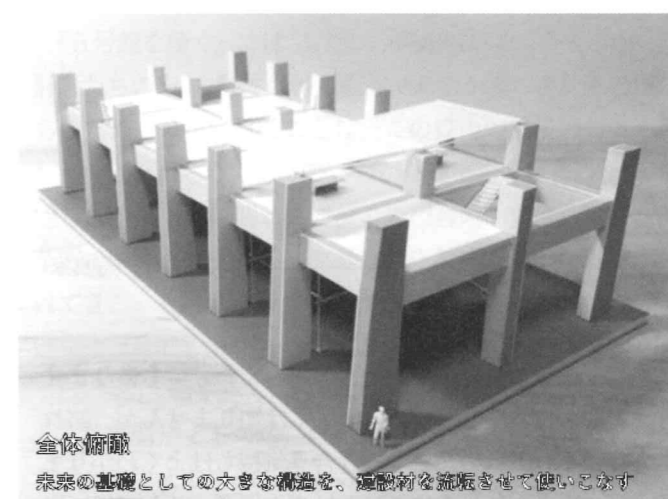
(『日本建築史序説 増補 第三版』/太田博太郎/彰国社)



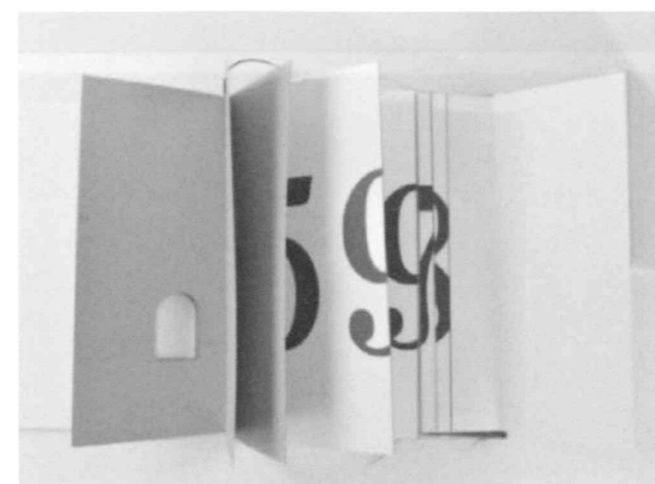
最優秀賞「無題」富樫由美(フリーランス) 上/コンセプト 下左/ワンピース 下中/学食カレー 下右/クッキー



辻琢磨賞「積み記憶碑」森本あんな(理工建築1年)、湯川智咲(同)



古澤大輔賞「駿河台の基礎」山本留以(東京藝術大学大学院)



小野志門賞「tsumugu」須貝仁(理工建築3年)



「エンドレスタイムパーク」大賀行雄(フューチャーリンク建築社)

## 5号館を聴く —— 北川健太 (桜建会青年部代表)

9月15日葬式当日を締めくくるのは建築のための儀式です。それは特定の宗教や人間のための何かをなぞらえるわけではない、新たな儀式です。

葬式とは本来、去りゆく者の記憶を皆で大切に受けとることだと考えます。そこで私たちが用意したのは、5号館の各所に宿る建築の声を耳を傾ける空間です。

5号館に触れ、5号館の歩みを知り、5号館に想いを馳せる。そのていねいな所作と気持ちの集合こそが儀式であり、葬式となることでしょうか。皆さんは建築に耳をあてたことがあるでしょうか？もしかすると、そこにはふだん気づかない、建築の声があるかもしれません。

これから先にも、きっと何度も建築の終わりと出会うことがあるでしょう。そのそれぞれの建物にふさわしい葬式があると思います。あるいは流転のかたちがあるかもしれません。

一つひとつとていねいな対話が行われるような習慣があたりまえになるような、そんな未来を思い描きました。



## 5号館を撮る —— 鈴木さや香 (写真家)

私は卒業生でも、この建物を利用したわけでもありません。ですので、5号館のことはよく知りませんが、訪れた方々がそれぞれの想いで向き合う気持ちはよくわかります。いつもあたりまえにあったはずの場所。そして思い出とともにあった場所。その場所とお別れをする姿は、あまりにも切ないのに、空気はやさしきで満ちていました。だから、私は5号館になった気分で撮ることにしました。

「ずっと見ていました」と壁から5号館の音が流れていました。見つめることは、愛情です。この日、建物がもっている記憶と愛情が人びとに届いているような気がして、幸せであたたかい情景でした。建物やものごとが消えたことすら気づかない、そんな時の流れもあるかもしれませんが、失うことと向き合う時間をつくることは必要なことだと感じました。

新しい喜びごとは、喪失感も受け入れた上に、その倍以上の愛情をもって迎えられるでしょう。愛情深く建物と向き合う人間はとても美しかったです。

## 5号館を弔う 佐藤慎也 (理工学部建築学科教授)

「建築の葬式」という企画を最初に聞いたとき、正直に言うと、「建築」に対して葬式を考えることには興味をもつことができず、この企画に対して距離を保ち続けてきた。ところが「葬儀」を具体化する際に、青年部のメンバーから「パフォーマンス的な要素を採り入れたい」という声があがり、紆余曲折があつて、以前から僕が活動をともにしてきたパフォーマンスプロジェクト「居間 theater」のメンバーが参加することになった。そして、葬儀としてのパフォーマンス作品をつくり出す現場に、結果的に巻き込まれることとなった。

こうしてつくられた作品が『5号館を聴く』である。当初は、あらゆる建築物にも応用できる葬儀が目指されていたが、実際に作品をつくり出していくプロセスは、紛れもなく5号館というたったひとつの建築物の葬儀へ向かうものとなった。「建築の葬式」には興味をもてなかったが、「5号館の葬式」であれば、この校舎を30年近く使ってきた者として、それを執り行う立場となることは必然だったのだろう。

『5号館を聴く』には、ふたつの声が見える。ひとつが「設計者たちの声」。解体される直前であるからこそ、その声にあらためて耳を傾けることは、この校舎の最後の日にふさわしいことだろう。もうひとつが「建築物の声」。設計者が望むと望まぬとに関わらず、この校舎の中では、自由なあり方で教育と研究という生活が60年にわたって行われ続けてきた。そして、その生活者の姿を見てきたものは、結局、建築物自身でしかない。

『5号館を聴く』では、5号館の中で、柱や天井から聴こえてくる音声としての「建築物の声」と、冊子に収められたテキストとしての「設計者たちの声」を重ね合わせることで、「5号館の声」を聴く。そのことが、5号館の最後の日には、ふさわしいものとなった。

しかし、実はいちばんの成果は、5号館をきれいに掃除できたことであつたのかもしれない。解体するからと、さまざまなものを散乱させて出ていった引越後の5号館を、卒業生たちがていねいに掃除してくれた。壊される前だからこそ、きれいに整え、思い出をもつ人たちを迎えられたことこそが、「5号館の葬式」にとって、とても重要な意味があつたのだろうと、今になって思う。

### 『5号館を聴く』 スタッフ

5号館の声／居間 theater (東彩織、稲継美保、宮武亜季、山崎朋)、佐藤慎也  
会場構成・設営／小野志門、中島行雅  
アーケード映像・音／中島行雅  
スライド室音声編集／田中麻未也





# さよなら5号館

## 理工学部駿河台校舎5号館をふりかえる

### 最終回 ◎ピロティの壁面彫刻

すでに解体のための養生シートに囲われている5号館。この連載の最終回は、多くの人が出入りしたピロティの壁面彫刻を制作した小野襄先生を取り上げた。生産工学部で教鞭を執っていたころ、その警咳に接した泉幸甫先生に、ご自身の思い出とともに振り返ってもらった。壁一面を飾ったエッジの効いた彫刻を制作した小野先生は、何を考え、何をつくり、どんな人だったのか。そして、新校舎のタワー・スコラには同作品が複製され、カフェに設置されている。その複製もあわせて紹介した。

(佐藤慎也／広報委員会委員長)

## オノ・ジョウの芸術性

泉幸甫 (元生産工学部研究所教授)

小野襄(本当はのぼると読む)先生のことを私たちは尊敬の念を込め、オノ・ジョウと呼んでいた。

小野襄先生を初めて目にしたときのことを今でもよく覚えている。授業時間になり、先生の助手が、「これから先生が来られるから静かにするように」との前もつての注意があり、教壇の上に何やら置いて帰った。しばらくしてビシッとスーツを着た、他の先生にはない存在感のある、不思議なオーラを持った先生が現れた。教壇の前に立つと、胸ポケットから箱を取り出し、そして何とタバコを吸い始めたのだ。助手が置いていったものは灰皿だった。その上で「君たちは吸わないの?」との言葉。いつもはうるさい教室が、シーンと呆気にとられた。

### 理解不能の授業と煙草

それから僕らにはまったく理解できない、何やら難しそうなことを、学生が分かるが分かるまいが関係なく、延々としゃべり始めた。普通、分かる話の方が聴衆は集中して聞くものだが、この場合は逆に自分たちが知らない何か未知の世界のことを話しているようで、むしろ分かりたいという気持ちが働き、キョトンとし

た感じでその講義は終わってしまった。そして、話をしている間中、タバコを切れることなく吸い続け、授業が終わったころには灰皿には二箱分の煙草の吸い殻でいっぱいになっていたが、その吸い殻が灰皿の中に見事な程に美しく並んでいた。

授業中の煙草のことや、まったく理解できない話と言い、さすが大学というところには一般社会とは違い、自由で、常識を超えた人がいるものだと思った。しかし、小野先生は専任の教員であったが、滅多に大学には来なかった。それは当時でも相当の風当たりはあったようだが、今ではとても許されないことだろう。しかし、何か未知のものにあこがれる僕たちは先生に興味をもち、先生が大学に来そうな日には研究室で待ち構え、そのうちに先生の自宅のアトリエを訪ねるようになった。

先生の一族は建築関係の人が多く、お父さんは構造の大家の小野薫、お兄さんは理工学部の構造の小野新であったが、先生は芸大の油絵を出た芸術家だった。絵だけでなく、造形作家であり、彫刻家でもあり、数学者、思想家とも呼べる幅の広い人だった。そんな先生のアトリエには芸術作品や、本棚には膨大な本が整然と並べ

られて、キリッとして美しいアトリエだった。それは、それまでに見たことのない芸術性と知性に溢れた世界だった。

私が大学を卒業するころの日本は高度成長真っ盛り。一流の建設会社だろうがどこでも就職できる時代だったが、すぐに働く気にはなれなかった。学園闘争で社会に批判的になっていたし、何か生きる意味を求めているのだろう。そのような精神状態もあり、身近に小野先生がおられ、自然と先生の下で建築に関係のない勉強を28歳まですることになった。

### 先生のそばで学んだこと

そこで、美しいものを見る習性や、作家としての生活、ものづくりの真剣さなど、また鋭く社会を見て、社会に流されずに距離をおく芸術家のプライドと伶俐さ、またそこから生まれる思想と造形活動が一体のものであることなど、多くのことを学んだ。しかし、先生はいわゆる建築家ではなかったから、建築の専門的なことどころか、社会に出てすぐに役立つようなものを何も学んだわけではない。先生に学んだことが建築と結びつくようになるのは、ずっと後

のこと。建築だけでなく、世界に何かモノを存在させるときの哲学という基本の基本を教えてもらったような気がする。本当の教育者だった。

身近で見る生身の先生は、人間そのもの、欲望の強い人でもあった。お金も女も好きで、権力欲も強かった。先生が作家であることを考えれば、それは当然のことであろう。もちろん一方で、芸術に対する純粹さ、人間としての気高さがあり、自由で、思想的に自立した人だった。

### 作品の真価とオリジナリティ

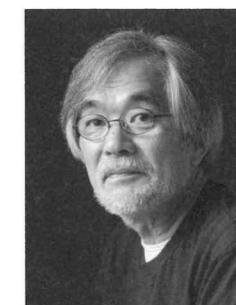
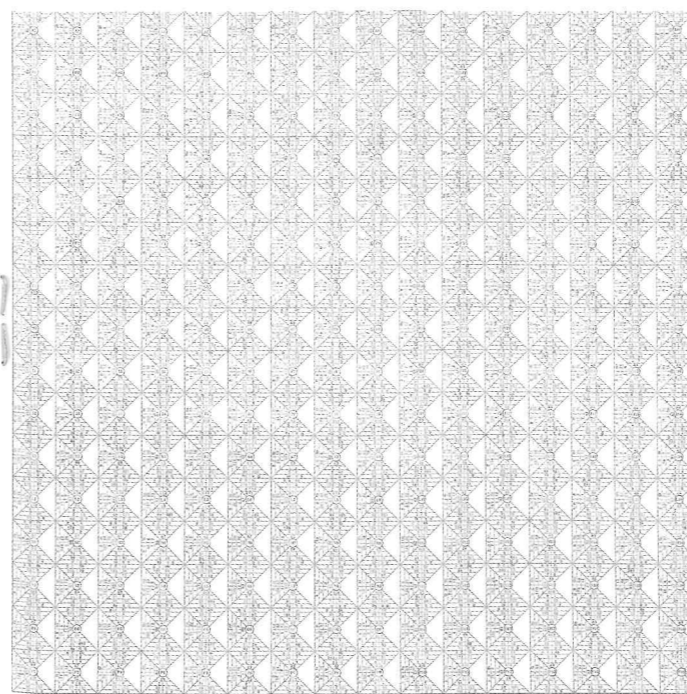
小野先生の仕事は絵画のほか、多数の造形作品、ONOJIN という造形プログラム、多数の論文などあるが、建築壁面としては3つの仕事、平塚

市議事堂外壁全面彫刻、ムービーセンター外壁レリーフ、それに今回壊されることになった理工学部5号館の壁面彫刻がある。この3つの壁面の仕事のうち2つはすでに壊され、残るのは理工学部5号館だけになっていた。弟子だから言うのではなく、この3つの作品はいずれも極めて芸術性の高いものである。しかし、残る作品も壊されると聞き、やりきれない思いがした。幸い、小野先生の作品を評価していただき、3Dスキャンを使った複製?が新建物に設置していただくことになったとも聞き、救われたような気持ちになった。

5号館の解体にあたって、小野先生の作品を改めて見に行った。60年近く経っているがへらの跡がまだ生

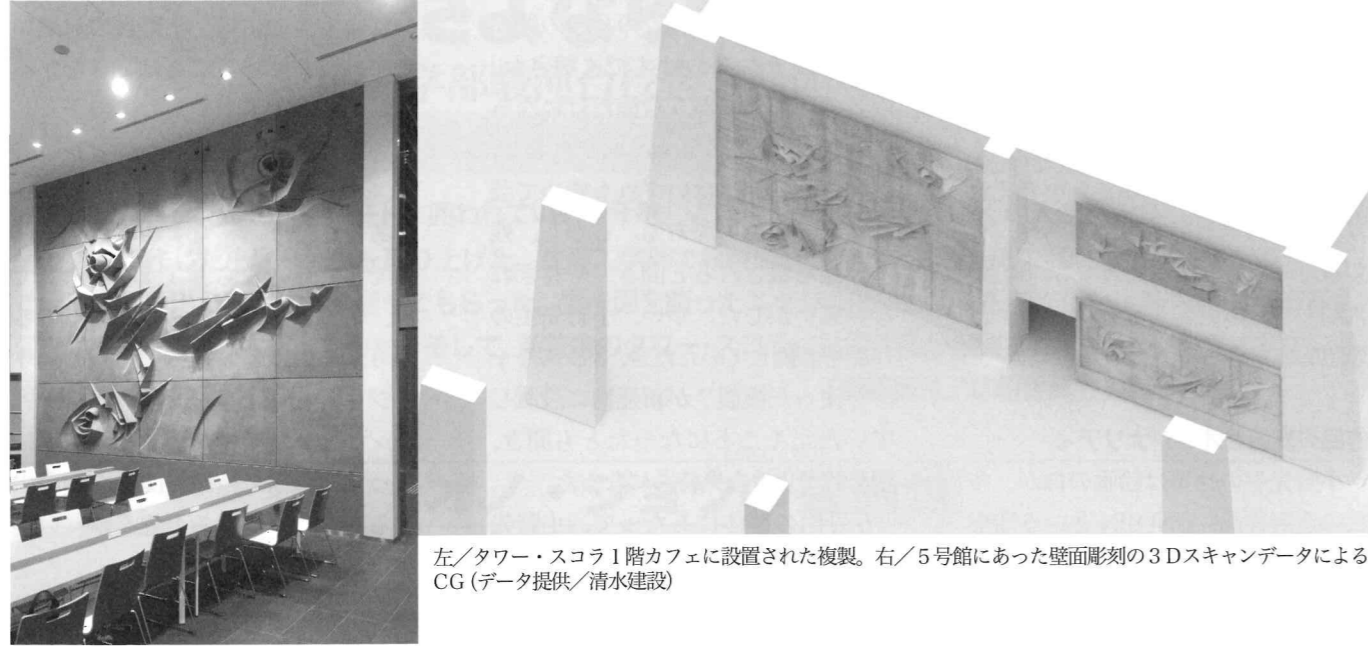
き生きと残っていて、そこから先生の息遣いが聞こえるようであった。一方、それを再現?した3Dスキャンによるものには、小野襄の息遣いをまったく感じることはできなかった。関係者の努力に対し、弟子として感謝しなければならないと思う一方、まったく違うと思ったのも事実であった。

できることなら、あの作品はPCで、いくつかの部分からなっているから、そのひとつだけでも残し、オリジナルと複製を比較することで、シンギュラリティが迫るこの時代にあつて、芸術と技術の関係を問い掛けるいい教材になると思うが、いかがだろうか。



左上/平塚市議事堂外壁全面彫刻。右上/小野先生のアトリエ。左下/造形プログラム「ONOJIN」。右下/自画像

Izumi Kousuke  
1947年 熊本県生まれ。73年 日本大学大学院生産工学研究科博士前期課程修了。77年 泉幸甫建築研究所設立。2007年 千葉大学大学院博士課程修了、博士(工学)。08~17 日本大学研究所教授(生産工学部建築工学科)。1999年「Apartment 傳(でん)」で東京建築賞最優秀賞受賞。2000年日本建築士上学会作品賞・材料の追及に対する10周年記念賞。04年「Apartment 鶴(じゅん)」で日本建築学会作品選奨受賞。14年 校長を務める「家づくり学校」が日本建築学会教育賞を受賞。11年作品集「建築家の心象風景・泉幸甫」。



左/タワー・スコラ1階カフェに設置された複製。右/5号館にあった壁面彫刻の3DスキャンデータによるCG(データ提供/清水建設)

### 近代建築と抽象芸術のコラボ

設計時、5号館のピロティは「アーケード」と名づけられており、設計者の宮川英二先生は、小野襄先生による壁面彫刻を設置した意図を以下のように書いている。「これは、近頃内外の建築に多くみられるように、合理に徹した建築空間に人間的な芸術をとり入れたいという意図——機能主義建築と有機的抽象芸術との協力——のためである。(中略)対決ではなく、協力・結合によって、全体として、個々では到底為し得ない、強いエネルギーの漲る空間が創りだされることが必要なのだと思う。であるから、われわれは建築の一部に額縁状に確然と区切つて、造られたその場所にだけ、手仕事の芸術を嵌込む、というようなことはしたくなかつた。」(宮川英二「設計以後(5号館実施についての覚書)」『連子』1959年11月号)

これは、岡本太郎や猪熊弦一郎と丹下健三、向井良吉と前川國男など、当時の建築家たちが画家や彫刻家と組んで、モダニズムの建築を総合芸術の場として示そうとしていたこと

と共通したものと考えられる。

### 検討された保存の方法

新校舎「タワー・スコラ」の建設にともない5号館の解体が決定する中で、この壁面彫刻の保存が検討された。結論として、オリジナルを保存するのではなく、オリジナルを3Dスキャンによりデータ化し、そのデータをもとに複製を製作し、「タワー・スコラ」に設置することとなった。また、実際の壁面彫刻は、ピロティ吹き抜け部、1階エレベータホール、2階エレベータホールの3パートに分かれていたが、ピロティ吹き抜け部のみが複製され、「タワー・スコラ」1階カフェに設置された。複製には硝子繊維補強石膏が用いられ、設置面の大きさに合わせて縮小(約86.5%)された。設置位置については、オリジナルから、そのまま西側に平行移動させ、ガラス面を通して外から壁面彫刻が見えるようになっている。

オリジナルには作家名などの表記はなかったが、複製に際して、小野先生の名前とともに、タイトル、制

作年が表記されている。タイトルについては、独自の名称が確認できなかったため、小野先生の作品集に表記されている「日本大学工学部5号館PCコンクリート壁面彫刻」が採用された。制作年は、5号館の竣工年(1959年)とした。

### 造形の力を信じて

もちろん、このような複製が保存と呼べるかどうかは異議をもつ方も多いだろう。3Dスキャンによる複製はかたちだけであり、オリジナルがもつ素材感は失われている。

また、そもそもこの壁面彫刻は、5号館と一体になって構想されたものであるから、その建築が失われた時点で、オリジナルが残っているとは言えないのかもしれない。

しかし、この壁面彫刻という魅力的なアートの存在が、例えオリジナルとは異なる存在になってしまったとしても、その造形の力によって、これからも学生や街に対して働きかける存在となってくれることを期待したい。

## 研究室紹介

研究テーマ

**近代の地方都市の建築と都市に関する研究、建築の保存と活用に関する研究、建築技術者の職能と法制に関する研究**

研究室名

建築歴史意匠研究室

教員名

教授・速水清孝

キーワード

近代/建築/地方都市/保存/技術者の資格制度

企業等への要望

共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等 その他

研究概要

当研究室では、日本の近代の建築と都市、そしてそれらに携わる技術者に起きた変化を研究の対象としています。そこではことに、著名な建築よりはよりふつうの建築を、大都市よりは地方都市を、建築家よりは建築技術者を視野に入れるかたちで研究を行っています。幕末・明治以後の近代という時間の中で、より一般的なものに起こった変化が現在をかたちづくっていると考えるからです。

具体的には、例えば、建築については、第二次世界大戦によって工事の中断を余儀なくされた福島県庁舎(1954年)の建設の過程と建築の特徴の解明を通して、着工から80年を経たこの庁舎の保存の可能性を探ってきました。また、都市については、福島市・いわき市・会津若松市などを取り上げて、耐火建築促進法(1952年)や防災建築街区造成法(1961年)によってどのように都市がかたちづくられてきたのかを、そして、建築技術者については、建築士法(1950年)を中心とする資格制度の成立と展開に注目するかたちで、建築技術者の職能がどのように形成されてきたのかを明らかにしてきました。

これらはいずれも、私たちの現在をかたちづくったものへの注目を通して、私たちの現在の立ち位置をより正しく知りたいという欲求によるものです。

連絡先◎工学部建築学科郡山キャンパス9号館310号室 TEL024-956-8872 E-mail hayami.kiyotaka@nihon-u.ac.jp

研究テーマ

**文化・教育など施設・空間計画に関する研究、地域資源の役割・活用に関する研究、震災後の復興・住まい・まちづくりに関する研究**

研究室名

建築計画研究室

教員名

教授・浦部智義

キーワード

建築/各種施設/計画/空間/都市/地域/まちづくり

企業等への要望

共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等 その他

研究概要

当研究室では、さまざまな建築・都市空間における人の心理・行動と建築・都市空間構成要素との関係性を分析することで、建築空間の計画・設計に有効な指針となるような研究成果を目指しています。その中には、時代を経ても比較的普遍的なものから、ライフスタイルや価値観の変化にともなって、人が空間から受ける印象や空間における人の行動のあり方が時代によって変化することもあると考えます。そのことを踏まえつつ、現在・未来に役立つような成果を、研究として、建築として社会に還元することを意識しています。

その過程で、文献調査をはじめフィールドワークを中心としたさまざまな調査、定性的・定量的なデータ分析、プロジェクトへの参画などを通して、地域性・経済性・持続性なども合わせて建築のあり方を継続して考察しています。それらの蓄積を活かして、東日本大震災以降は福島県浜通り地域の復興に携わっていますが、これはわが国がやがて迎える超高齢化社会のパイロットケースとしての意味ももち合わせていると思います。

多様に変化する社会で、結果的に多様性ということばに置き換えられたとしても、その背景にある何かを追って試行錯誤し続けることが大事だと考えています。

多様に変化する社会で、結果的に多様性ということばに置き換えられたとしても、その背景にある何かを追って試行錯誤し続けることが大事だと考えています。

最近の研究室プロジェクトのひとつ葛尾村復興交流館「あぜりあ」



連絡先◎工学部建築学科郡山キャンパス45号館304号室 TEL024-956-8743 E-mail urabe.tomoyoshi@nihon-u.ac.jp



# もうひとつの世界から・第5回

拡大版

世界遺産の旅 木村翔 (日本大学名誉教授)

今回は、理工学部建築学科で環境系研究室を創設した木村翔先生に寄稿いただいた拡大版。“もうひとつ”のテーマは世界遺産です。大学を退職されてから18年。500余の遺産を訪ね歩く木村先生に世界遺産の歴史や現況をご紹介いただいた。

ユネスコの世界遺産は、1972年に採択された「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」に基いて、毎年、世界遺産リストに登録される。日本は92年にこの条約を批准し、翌93年、法隆寺・姫路城・白神山地・屋久島の4件が初めて世界遺産に登録された。

## 興味のきっかけ

1997年から99年にかけて、近畿日本ツーリストからガイドブック『世界遺産を旅する』が、第1巻のイタリア・ギリシャ・マルタから第12巻のエジプト・アフリカまで計12冊刊行された。この本の写真を見ながら世界各地の紀行を読んだのが、世界遺産に興味をもつ始まりとなった。

私の初めての海外旅行は65年夏、1ドルが360円の時代、ベルギーのリエージュで開かれた第5回国際音響学会議での論文発表とヨーロッパの主要なコンサートホール、オペラハウスを訪問、視察することが主な目的であった。一方で、その前後に60日をかけてヨーロッパ各国を巡り、高度成長に突き進む当時の日本の状況からは考えられないほど落ち着いた、ヨーロッパの美しい街並みや環境と調和した建築の魅力にとりつかれることになった。その後、70年代に入ってからリタイアするまでの30年間は、欧米のホールを巡ってオペラやコンサートを鑑賞する「音のたび」が、当時の私の趣味のひとつとなった。

私が欧米と東南アジア以外の国に初めて出かけたのは、99年3月のエジプト9日間の旅であった。97年ハトシェプスト女王葬祭殿のテロ事件が起きて禁止されていたエジプト旅行が解禁された直後のツアーに、家内と参加した。

2001年のリタイア後は、旅行の範囲を東ヨーロッパからコーカサス、西アジア、中近東、中央アジア、北アフリカから西アフリカ、東南アフリカへ、オセアニアから中米、カリブ、南米へと世界各地に広げつつ、積極的に世界遺産を訪れる旅を選んで海外へ



レプティスマグナ遺跡(2〜3世紀)のセヴェルス帝のフォーラム、リビア。2005年11月

出かけるようになった。

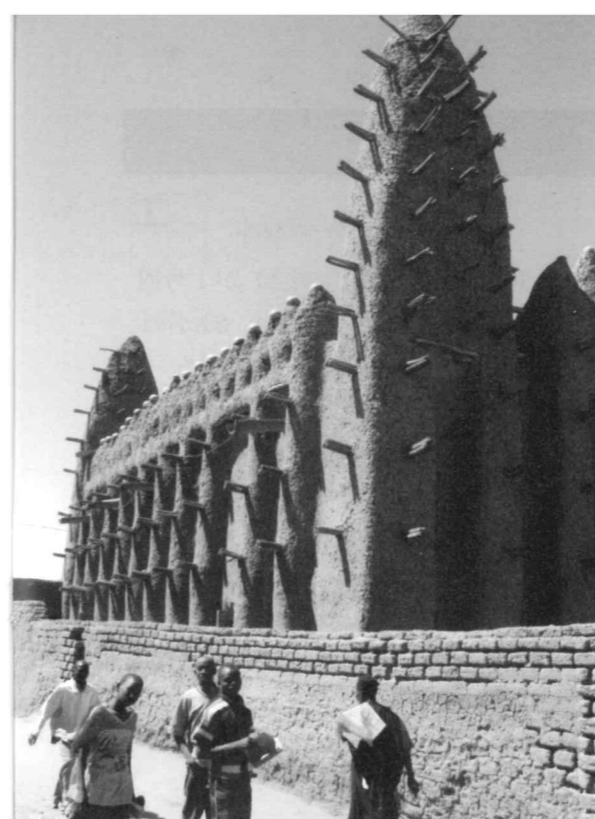
## 文化遺産の価値

世界遺産のうち私がかもつとも興味を惹かれるのは文化遺産である。文化遺産は、普遍的な価値をもつ優れた建造物・遺跡・記念工作物・文化的景観などで、(1)人間の創造的才能を表す傑作であること、(2)世界のある文化圏で建築物・技術・都市計画・景観設計などの発展に大きな影響を与えたこと、(3)文化的伝統や文明に関する独特な証拠を示していること、(4)人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、建築的・技術的集合体、景観に関するすぐれた見本であること、(5)ある文化を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地利用の一例であること、(6)顕著な価値をもつできごと、伝統、思想、信仰、芸術的・文化的作品と関連があることなど、6つの登録条件をひとつ以上満たしていることが求められる。

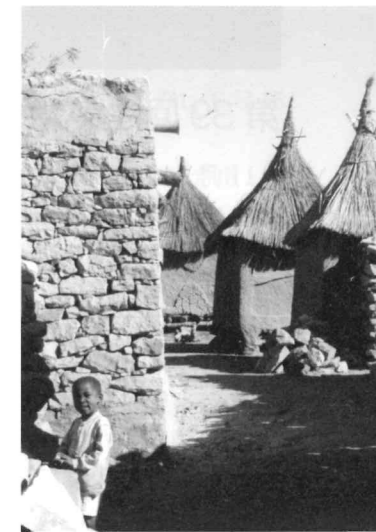
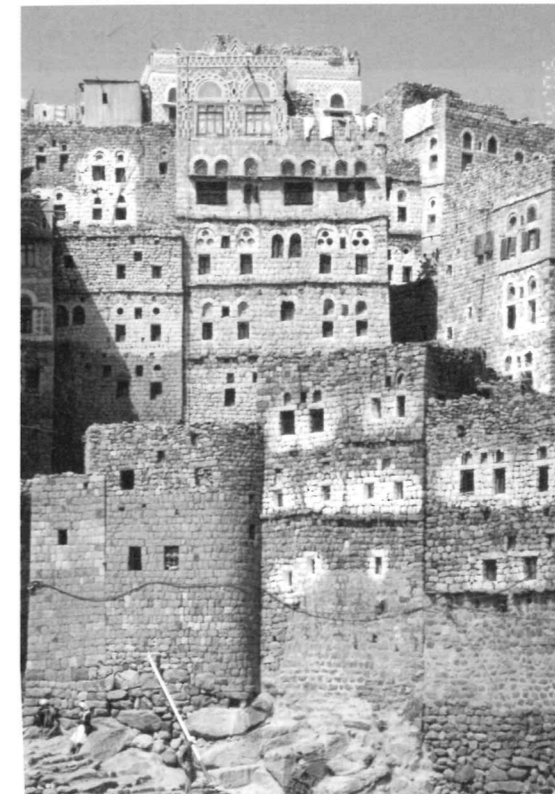
世界遺産の数は毎年増え続けている。2014年には世界遺産の総数が1000件の大台を突破し、1007件となった。この年、日本では「富岡製紙場と絹産業遺産群」の登録が決定した。

## コルビュジエと日本の遺産

2016年には、世界遺産の総数は1052件となった。09年、11年に世界遺産登録を目指していた建築家ル・コルビュジエの作品群は、いずれも登録失敗に終わっていたが、16年に7か国17作品に絞った3度目の挑戦で、ついに世界遺産リスト入りが実現した。世界遺産「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献」は、フランス10、スイス2、ドイツ、ベルギー、アルゼンチン、インド、日本(国



コロ村、スーダン様式のモスク。ジェンネの大モスクと同様に、日干し煉瓦に泥を塗って造られたもの、マリ。2008年1月



左/標高2500メートルの険しい山の頂にしがみつくように建ち並ぶハジャラの住居群、イエメン。2006年1月。上/バンディアガラの断崖の近くのドゴン族の集落、マリ。2008年1月

立西洋美術館本館)各1の7か国17作品からなる。

17年には、日本の沖ノ島をはじめ新たに21件の世界遺産が誕生している。この年、アフリカのアンゴラとエリトリアに初の世界遺産が誕生し、世界遺産を保有している国は167か国となった。18年には、日本の「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を初め19件の世界遺産が登録され、世界遺産の総数は1092件(文化遺産845、自然遺産209、複合遺産38)となっている。現在の日本の世界遺産の総数は22件(世界で12位)である。

中国は16年に2件増やして50件となり、最多保有国イタリアに1件差まで詰め寄せた。しかし、17、18年と両国は同数ずつの世界遺産が登録されたため順位は変わらず、現在はイタリア54件、中国53件と1件差のまま首位争いを続けている。

私が訪れた世界遺産の数は2018年10月現在で525件、訪れた国・地域は148。中でも、日本に比較的なじみが薄いアフリカ、中近東、アジア、中南米の国々に、私の強く印象に残る世界遺産が多い。これらの国の人たちは、いずれも日本人に友好的で、こうした旅の中でのんびりとふれあいが、旅の思い出をいっそう素晴らしいものにしてくれる。

これまで訪れた世界遺産の数が、当初から目標にしていた500件を超えたことと、年齢が90歳に近づき、体力的にもあまり無理がきかなくなってきたことから、私の世界遺産の旅にもこの辺で最後の区切りをつける必要があると考えている。



上/クラック・ド・シェバリエに近いシリア中部の街ハマの友好的な現地の人。「どこから来たのだ?」と話しかけてきた。2005年1月 中/ケープコースト近郊の自由市場前にある中学校の生徒たちと、ガーナ。2008年1月。下/ガメダス近郊のカフェにて、リビア。2005年11月



Kimura Sho  
1931年東京生まれ。54年日本大学理工学部建築学科卒業。56年日本大学大学院建築学専攻修士課程修了。65年日本大学教授。工学博士。67年日本建築学会賞(論文)。2001年日本大学名誉教授。06年日本音響学会功績賞、10年瑞宝中綬章、12年「建築音響工学の研究と教育とその発展に対する貢献」により、日本建築学会大賞受賞。

## 事務局だより

### 第39回建築講座 & 特別維持会員懇親会開催

11月14日18時より、理工学部駿河台キャンパス1号館で第39回建築講座が行われた。今回は、日本

建築学会の各賞を受賞した方々を招き、各々の業績について講演いただいた。その後「桜建ふれあい2018」

(特別維持会員の懇親会)が1号館カフェテリアで開催され、81名の参加者が集い、盛会に終わった。

### 台湾研修旅行

10月27日～30日にかけて、研修旅行が実施された。今回の目的地は台湾で、古建築から現代建築までの貴重な場所の見学ができた。

参加者は28名でとても楽しい旅となった。

### 「NUアート倶楽部」第6回アート展開催

第6回アート展が、10月8日～13日まで、理工学部駿河台キャンパス1号館5階CSTギャラリーで開催された。今回の出展者は70名(一般43名+学生27名)で、9日には懇親パーティーが盛大に行われた。

### 平成30年度秋季ゴルフ大会

11月28日、埼玉県武蔵松山カントリークラブで、秋季ゴルフ大会が開催された。参加者は16名、優勝者は畑中勝美氏(理工建-60)であった。



### 愛知県支部総会報告

6月23日、桜門建築会愛知県支部総会を中日パレスで開催した。日大校友会愛知県支部長筒井隆彌氏(法・S43卒)を来賓に迎え、総会に続き、魚津源二氏(魚津社寺工務店会長・S38年理工経工卒)の「名古屋城本丸御殿工事を終わって」と題した講演を行った。本丸御殿は、

尾張藩主の住居・政庁として1615年に建てられ、1945年の空襲で焼失。2009年から復元工事が始まり、三期の工事が終わり、この6月8日から全体公開されたところである。魚津氏は、第一期工事から大工工事を担当され、工事担当者と同職種職人の意気込みなど工事の裏話を含め、ユーモアあふれた楽しいお話を展開された。名古屋城は、耐震性

確保のため天守の木造復元計画もあり、今後も話題が多い。

5月のアメフト部問題後で、日大への風当たりの強い時期なので、懇親会では大学の今後の対応に期待しつつ、また日大建築の力をさらに示したいといった意見もあり、同窓意識を確認できたと考えている。参加者は22名と例年より減少した。(神谷清仁/支部長、S44年工卒)

### お詫びと訂正

平成30年度桜門建築会特別維持会員名簿におきまして、以下の間違いがありました。お知らせとともに訂正し、謹んでお詫び申し上げます。

(誤) 株三菱伊勢丹プロパティ・デザイン

(正) 株三越伊勢丹プロパティ・デザイン

桜建会報 NO.113 2018-December  
発行人 齋藤公男  
編集 桜門建築会広報委員会  
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14  
日本大学理工学部内

広報委員会  
委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)  
副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)  
矢代真己(短期大学部建築・生活デザイン学科)  
委員 大川三雄(理工学部建築学科)  
山本和清(理工学部海洋建築工学科)  
亀井靖子(生産工学部建築工学科)  
齋藤俊克(工学部建築学科)  
北川健太(セカイ)  
大西正紀(mosaki)  
西山麻夕美(フリー編集者)

桜建会事務局  
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。  
理工学部駿河台校舎タワー・スコラ7階S708奥  
TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216  
E-mail kaiin@okenkai.jp  
ホームページ http://www.okenkai.jp/  
専任/星野麻衣子  
非常勤/櫻井佐和、大木明子  
業務時間/AM10:00～PM5:00(月～金)

## 学部ニュース

### 工 トピックス

◎柳沼明日香さん(浦部研・H29年度卒)が、3月26日に行われたJIA東北学生卒業設計コンクール2018で最優秀賞を受賞し、6月23日に行われたJIA全国学生卒業設計コンクールに出展、一次審査を通過した。

◎浦部智義教授と浦部研究室が関わった、福島アトラス02『避難社会とその住まいの地図集』が3月31日に発刊した。

### 理 工 海洋建築工学科トピックス①

◎7月17日、桜井慎一教授、卒業生の渡邊亮(社会安全研究所)、鷹島充寿(日本工営)の3名は、沿岸域学会誌 Vol.30 No.1(2017年6月30日発行)に掲載された論文「津波ハザードマップの表記内容の統一性に関する研究-全国の沿岸市町村における不統一の現状と課題-」で、平成30年度日本沿岸域学会論文賞を受賞した。

◎新宮清志名誉教授は、11月16日、九州工業大学で開催された「北九州市の『産・学・官』が連携した第9回建築構造系講演会」(主催/日本建築構造技術者協会九州支部北九州地区会)で、「シェル構造の強さの秘密から減衰まで」と題して講演を行った。

◎佐藤信治研究室が毎年秋田県で開催

◎齋藤俊克専任講師は、4月13日、Polymers-in-Concrete 委員会第174定例会において、「ポリマーセメントモルタルの性能評価に係る試験方法の検討」と題して講演された。

◎速水清孝教授は、5月18日、福島県建築士事務所協会青年部平成30年度定時総会で、「福島県の歴史的建造物の現状とこれから」と題して講演された。

◎福島県建築士会主催の第23回ふくしま住宅建築賞最優秀賞に阿部直人非常勤講師が設計された「集いの家」、優秀賞に佐久間宏一非常勤講師が設計さ

するまちづくり合宿について、横手市増田町地区で報告会を行った。また、その報告会の模様が秋田県の『魁新報』に掲載された。今年の合宿では、9月11日から14日にかけて横手市増田町地区で現地調査を行い、それまで調べた内容と比較検討しながら、提案をプレゼンテーションした。



『魁新報』に掲載された合宿の記事

れた「散歩道の家」が選ばれ、6月15日に表彰された。

◎浦部智義教授らが書いた、「郡山・希望ヶ丘プロジェクト-福島住まい・まちづくりネットワークの活動拠点-」がBIOCITY(2018, No.75)特集「東日本大震災、復興の光と影」に掲載された。◎堀川真之助教は、コンクリート工学年次大会2018(神戸)で発表した論文「高強度RC柱に生じる初期応力が2方向曲げ性能に及ぼす影響」で、年次論文奨励賞を受賞した。

### 理 短 工 大 トピックス

◎大川三雄特任教授、佐藤光彦教授、重枝豊教授、田所辰之助教授、加藤千晶助手、矢代真己短大教授、また建築史・建築論研究室の卒業生(大山亜紀子・勝原基貴・染谷正弘・高木愛子)たちが執筆に関わった『日本のインテリアデザイン全史』が柏書房より出版された。日本建築のインテリアの特徴を、古代から現代まで通史的に俯瞰し、その全貌を示したものとなる。



『日本のインテリアデザイン全史』の表紙

### 生産 工 トピックス①

◎9月22日、市民プラザ大久保交流スペース2・3にて開催された「ならしのスタディーズ-習志野・大久保の3年後のミライを話そう-」において、建築デザインコースのプロジェクト成果『こんな大久保あったらいいな展』が披露された。

◎6月29日の『神戸新聞』と『神戸新聞NEXT電子版』に、渡辺・亀井研究室

の合同ゼミ旅行の様子を紹介した「宮脇檀氏ゆかりの建築物を日大生ら見学 出石」が掲載された。

◎5月23日、ミシシッピ州立大学(MSU)建築・芸術・デザイン学部のGreg G. Hall教授(MSU副学長 専門/建築・施工管理)が来校し、日本大学生産工学部との間で教育・学術交流に関する学部間交流協定が締結された。

### 理 工 建築学科トピックス①

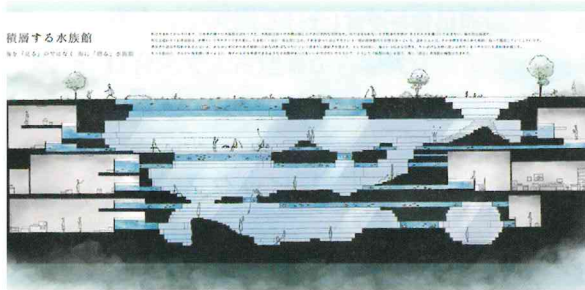
◎「第40回コンクリート工学講演会」(主催/日本コンクリート工学会)で、笠原貴喜君(長沼・田嶋研、M2)の論文「超高強度鉄筋コンクリート柱の加熱冷却後の構造性能に関する解析的研究」と河野圭一郎さん(長沼・田嶋研、M修了)の論文「非線形領域を考慮した偏心RC造骨組のねじれ応答評価手法の構築」が、それぞれ年次論文奨励賞を受賞した。





## 海洋建築工学科トピックス②

◎大学・短期大学・専門学校・高等専門学校で取り組んだ設計課題作品を対象に実施するコンテスト「建築新人戦」で、中村美月さん(3年)の「積層する水族館」がBEST8に選定された。今年度は、2次審査で選出された8作品の公開審査会・プレゼンテーションが9月22日に梅田スカイビル タワーウエストで行われた。



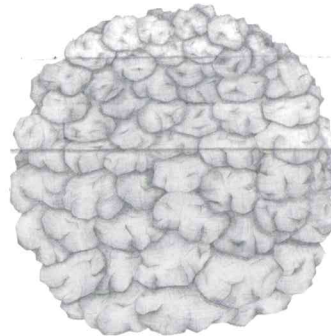
「積層する水族館」



## トピックス②

◎本学科が主催した「教育者・宮脇檀へのオマージュ展 一居住空間デザインコースで教えたこと」と「建築家・宮脇檀へのドローイング展 巡回展」(主催/JIA-KIT 建築アーカイブス)は、展覧会延べ819名(内訳/学生429名、一般390名)、シンポジウム(9月29日)「穴が開くほど見る一建築写真から読み解く暮らしとその先 宮脇檀特別版」は約150名、トークイベント(10月20日)「教育者としての宮脇檀を語る」は119名の方にご来場いただき、盛況の中、10月21日に幕を閉じた。

◎7月22日、第9回JIA・テスクチャレンジ設計コンペ(テーマ/冬の光と過ごす空間)で、金沢萌さん(岩田研4年)と池田光君(岩田研M1)の作品「長い夜のほのあかり」が最優秀賞を受賞した。



上/木材倉庫のミュージアム。中/「Architectural Cenotaph」。下/「Layersd boundary」



## 建築学科トピックス②

◎「学生を対象としたバイオマス発電用ペレット収蔵施設外装デザインアイデアコンテスト」(主催/シンエネルギー開発)で、柳沼明日香さん(佐藤光彦研M1)と東京電機大学大学院生2名のグループ「team komakoma」の作品「木材倉庫のミュージアム〜風景を記録する玉手箱〜」が「最優秀賞」を受賞した。本賞は、バイオマス発電に利用するペレットを収蔵施設の外装デザインを学生を対象に募ったもの。最優秀賞案をもとに実施設計が行われる予定である。

◎「第34回釜山国際建築大展2018(国際アイデアコンペティション)」(主催/韓国建築家協会釜山建築家会、日本建築家協会近畿支部、天津市建築学会)で、力武瑞穂さん(田所研M1)の作品「Architectural Cenotaph」が「優秀賞」、高橋樹君(今村研M1)の作品「Layersd boundary」が「奨励賞ブロンズ賞」を受賞。力武さんは三次審査に進出し、現地での発表を経て、最優秀賞1点に次ぐ優秀賞1点に選ばれた。



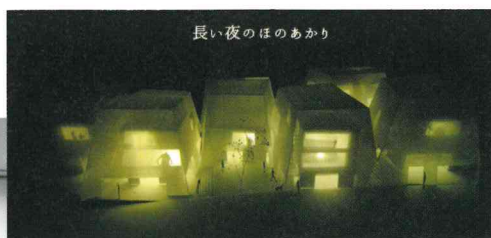
連鎖する生命の庭



上/「連鎖する生命の庭」下/「外纏庵」

◎「平成30年度日本造園学会全国大会学生公開デザインコンペ」(主催/日本造園学会)で、佐藤千香さん(山崎研M2)、横山大貴君(今村研M2)、藤井将大君(佐藤光彦研M2)の作品「連鎖する生命の庭」、稲毛田光太君、村岡祐美さん(すべて今村研M2)の作品「『京のたむけ野辺』〜地形で吊う造園葬〜」が、それぞれ「優秀賞」を受賞。テーマは「『庭』の力を生かした京都の再生」。

◎「学生グランプリ2018『銀茶会』の茶席」(主催/日本建築学会)で寶迫嘉乃さん、藤井将大君、山本紘久君、菅野匡晴君(すべて佐藤光彦研M2)、鴛海昂君(岡田・宮里研M2)、田川磨理沙さん(佐藤光彦研M1)、北島晃大君(同4年)の作品「外纏庵—外界を纏う竹のカーテン—」が審査員賞の「加藤詞史賞」と「関野宏行賞」を受賞した。



長い夜のほのあかり

左/「教育者・宮脇檀へのオマージュ展」会場のエントランス。上/「長い夜のほのあかり」